



20回の節目を迎えた能登よさこい祭り。6月10日(金)の前夜祭は能登食祭市場、11日(土)から2日間は和倉温泉街を舞台に、県内外から64チーム約2,000人が集い行われた。

第1回から参加してきたチームはわずか3チーム。高知のよさこいから学びはじめた祭りは、鳴子を使った踊りを基本に年々進化。傘や扇子を用いるなど華やかさを増した能登よさこい祭りならではの踊りが祭りを盛り上げる。

毎年、各チームが想いをついに、独自の曲や振り付けを作り上げ練習を積み重ねて挑む。わくわくステージや総湯前、県道通りなど多くの演舞場で熱い演舞が繰り広げられ、掛け声と共に鳴り響く鳴子の音。風土の唄や色鮮やかな衣装を身にまとい、糸乱れぬ演舞で観客を魅了する。踊り人と観客が一つになった瞬間、演舞場では声援や拍手が沸き起った。

今年大賞を受賞したのは、チーム結成8年の志賀町「舞士道」。7回目の参加で栄冠を手にし、歓喜の輪ができていた。七尾の各チームも、大賞チームに負けない演舞を披露し観客の心をしっかりとつかんでいた。この祭りが20回を通過点に、どんな発展を遂げていくのか観客は今から来年の開催を待ち望んでいた。



風土の唄で  
踊れよさこい  
ただ狂え

